

当院におけるアピキサバンの使用状況

兵庫県立姫路循環器病センター 薬剤部¹

兵庫県立姫路循環器病センター 循環器科²

兵庫県立こども病院 薬剤部³

高村志保¹、上田里恵³、岸本静佳¹、鹿島孝子¹、兵頭純子¹、岡嶋克則²

【目的】新規抗凝固剤（NOAC）では、投与開始時の減量基準が添付文書に明記されており、該当患者では本基準の厳守が安全な使用のためには不可欠であるが、不必要な減量は有効性の確保のために好ましくない。今回、NOACの中のアピキサバン（エリキュース®）について開始時の状況を把握し、適正使用につなげることを目的として使用状況調査を行った。

【方法】平成25年8月1日から平成26年7月31日の1年間に、当院でアピキサバンの投与を開始した151名について、後方視的にカルテを調査した。調査項目は患者の年齢、体重、血清Cr値、ワルファリンからの切り替え症例ではPT-INR値とした。【結果】減量で開始された37例中19例（51%）は減量基準を満たさない症例であったが、その理由は高齢、低体重、出血既往歴あり、抗血小板剤併用例等であった。またワルファリンからの切り替え症例の約75%が、切り替え時のPT-INR値が2.0未満であり、PT-INR値が2.0を上回っていた症例では服用開始日を2～3日遅らせていた。【考察】実臨床においては添付文書記載の基準以外にも出血リスクの上昇が懸念される場合があり、より慎重に開始しているのが現状である。またワルファリンからの切り替え症例では出血リスク管理が正しく行われていると考える。当院において、服用開始後のアピキサバンの忍容性は高いが、副作用としての出血には注意が必要である。患者指導の際にはより注意喚起を行い、アピキサバンが安全に使用できるよう関わっていきたい。